みちくさ懇談会　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2017.2.7　北村尚巳

**日米戦争を起こしたのは誰か**

ルーズベルト大統領の罪状・フーバー大統領回顧録を論ずる

著者：、、、

出版社：勉誠出版㈱

本書は、第31代アメリカ大統領ハーバート・フーバーの大著“FREEDOM BETRAYED”『裏切られた自由』（2011年刊フーバー研究所）のエッセンス\*を伝えようとするもの

（本邦未訳）

１．序 　 加瀬英明（ハーバート・フーバー論） （p13－33）

２．鼎談　“FREEDOM BETRAYED”を巡って　藤井厳喜、稲村公望、茂木弘道

　　　　　 第一章　誰が戦争を仕掛けたか （p37－68）

　　　　　 第二章　過ったアメリカの政策 （p71－135）

　　　　　 第三章　戦争を引き起こした狂気 （p139－166）

３．ウェデマイヤー将軍の回想――第二次大戦に勝者なし　藤井厳喜　（p167－235）

４．いま明らかになった大東亜戦争の真相   
――「FREEDOM BETRAYED」の衝撃　稲村公望 （p237－265）

５．日米戦争は狂人の欲望から---フーバー第31代大統領の証言　茂木弘道　（p267－285）

＊①日米戦争は、ルーズベルト大統領が仕掛けたもので、日本の侵略が原因ではない。

②1941（昭和16）年の日米交渉では、ルーズベルトは日本側の妥協を受け入れる意図は、初めから全くなかった。日本側の誠実な和平への努力は実らなかった。

③原爆を投下せず日本を降伏させることが出来た。原爆投下の罪は、重くアメリカ国民の上にのしかかっている。

**ハーバート・フーバーの人柄**（序文より）

ハーバート・クラーク・フーバーは、アメリカ史における稀にみる逸材

富裕な家に生まれたフランクリン・D・ルーズベルト（第32代大統領）やジョン・F・

ケネディ（第35代）と違い、幼年期に両親を失い、艱難克己して世界的な新規鉱脈開発の波に乗って、鉱山業で成功をおさめて若くして億万長者となった。

1921年ハーディング大統領（任期半ばで亡くなりクーリッジが大統領に）の商務長官。1927年ミシシッピ川氾濫で救援と復興の指揮をとり、超人的な手腕を発揮し、期待と人気が高まる。1928年の大統領選挙に共和党候補として、全米的な人気を駆って、地滑り的な勝利を獲得し、1929年3月大統領に就任。フーバー政権登場により、未曽有の繁栄を期待されると株価は急暴騰。しかし、不運にも世界恐慌が勃発、フーバーは大不況に振り回されて有効な対策を打ち出されず、1932年の選挙で惨敗して再選を果たせなかった。（40州以上で敗れる惨敗）

フーバーは逸材であったものの、大恐慌と同義語となって、今日に至っている。

経済大恐慌に見舞われるまでは、卓越した企業家であり、稀に見る有能な行政官と見なされていた。1914年第1次世界大戦が勃発した時、実業家としてロンドンにあり、人道的　動機から深刻的な食糧不足に陥ったベルギーとフランスに援助の手を差し伸べた。

学究の徒として歴史の真実を追求することが、フーバーのもう一つの情熱であった。

第一次大戦後に、それまで蒐集してきた膨大な歴史資料を母校のスタンフォード大学に寄贈して『戦争ライブラリー』として創設された。（のちに「フーバー研究所」の元）

3年8ケ月にわたった不毛な日米戦争は「ルーズベルトというたった一人の狂人が引き起こした」と糾弾している。

日本はペリー艦隊が1853年に浦賀沖に来航して以来、アメリカの国益を一度として

損ねたことがなかったにもかかわらず、ルーズベルト政権によって戦争を強いられたのだった。

（フーバーの人柄のその外の側面）

**人種差別主義者**　「アジア人種とは知能がきわめて低い」、中国人について「無能、

不正直で、全員が詐欺師だ。役人は全員が腐敗しきっている」。1923年に連邦議会が

排日移民法を審議した時に、「（日本人は）生物学的、文化的な生い立ちが異なっており、東洋と西洋の血が混じることがあってはならない」。それにもかかわらず、フーバーは、アメリカにおけるユダヤ人差別に反対し、黒人の生活向上に努めた。

**人道主義者**　（1921年商務長官在任中に）ロシアが共産革命によって混乱に陥って飢饉が発生し、大戦に敗れたドイツ国民が食料不足に喘ぐようになると、（共和党有力議員のソ連への援助反対があったが）ソ連とドイツに食料支援を実施した。

**個人主義**　個人の自由を尊ぶ。アメリカは、個人による努力の成果の上に築かれた。万人が知性・人格・能力・志にもとづいて夢を実現できる、平等の機会を保障されている。

**社会主義への反対**　（上述のような）不動の信念の持ち主であり、個人の自由の信奉者であったから、専制をもたらす社会主義に反対した。

**フランクリン・ルーズベルト**（序文より）

　フーバーを破ったルーズベルトは、今日でもアメリカでの偉大な大統領であり、近代アメリカの巨人だったとして敬われている。

歴代アメリカ合衆国大統領のランキング（ウィキペディア）

フーバーは、ルーズベルトは容共主義者であり、ルーズベルト政権の中枢が共産主義者によって浸透されていることを承知していた。

フーバーは、スターリンの独裁下にあったソ連の脅威に対して、警鐘を鳴らし続けた。

1940年の大統領選で、ルーズベルト政権がスターリンと結ぼうとしていることについて、フーバーは共和党全国大会での講演で警告した。

フーバーは、1941年6月ルーズベルト政権が第2次世界大戦に参戦しようと企てていることに強く反対して、ラジオを通じて訴えた。「参戦によりスターリンが勝利することに手を貸し、われわれの犠牲において、スターリンがヨーロッパの大部分を支配下に収めることになる」。

アメリカは、日本に理不尽な経済制裁を加えて、追いつめることによって、この年12月に日本に第一発目を撃たせて、第二次大戦に参戦した。

その結果、スターリンのソ連が東ヨーロッパを支配下に取り込み、東西陣営間の冷戦がもたらされた。フーバーの警告が、的中したのだった。

**トルーマン**

1944年にルーズベルトが4選目の選挙に臨んだ時に、ミズーリ州選出のハリー・S・

トルーマン上院議員を副大統領候補として選んだ。

ルーズベルトは、トルーマンを軽蔑しきっていた。しかし、中部諸州の票がほしかったために、副大統領候補として組んだのだった。

そのために、1940年の大統領就任式典で、トルーマンと顔を合わせた以後は、副大統領であったにもかかわらず、1945年4月に急死するまで、一度も会おうとしなかった。

トルーマンが大統領に就任すると、フーバーは5月にドイツが連合国に降伏した後に、

日本とできるだけ速やかに講和をはかるように進言した。

**フーバー**は、「日本はアメリカと価値観を共有する国である」といって、「日本が戦後、朝鮮半島と台湾を領有し続けることを認めるべきだ」とすすめ、また、「中国大陸からの日本の撤退は、できるだけ時間をかけて、ゆっくり行うべきである」と、提言した。しかし、アメリカの世論が日本に対する憎悪に湧き立っていたことと、軍部が強く反対したために、フーバーの提言は受け入れられなかった。

もし、トルーマン大統領が**フーバー**のアジアの安定を見通した提言を受け入れて、1945年7月以前に日本と講和を実現していたとすれば、その後、中国大陸が共産化することも、朝鮮半島が分断されて、朝鮮戦争が起こることもなかった。そして、ソ連が対日戦争に参加することもなかった。

ポツダム会議の席上で、それまで連合国が日本に対して無条件降伏を要求していたのを取り下げて、条件付降伏に改めることが決められた。宣言は、日本国軍隊の無条件降伏のみを要求している。

フーバーは第二次大戦最後の月の8月に、広島に原爆が投下されると憤り、『フーバー回顧録』おなかで激しく非難している。

（フーバー回顧録より）

「1945（昭和20）年7月のポツダム会議の前から、日本政府は繰り返し和平を求めている意向を示していた。ポツダム会議はこのような日本の動きを受け開催された」

「ヤルタ会談が1945年2月に催されたが、その1ヶ月後に日本の重光葵外相が、東京駐在のスウェーデン公使と会って、本国政府に和平の仲介を求めるように要請した」　　（進展はなかったが、日本が和平を求めている決意をはっきりと示したものだ）

　　　　「7月26日に、ポツダム会議が日本に対して最後通告を発するまで、日本は6ヶ

　　　月にわたって、和平について打診していた。日本は原爆投下の2週間前に、ソ連に対して和平の意図をもっていることを知らせていたが、トルーマンも、バーンズ（国務長官）、スティムソン（陸軍長官）も日本の外交電文を傍受解読して、承知していた」

「**トルーマン**大統領が人道に反して、日本に対して原爆を投下するように命じたことは、アメリカの政治家の質を疑わせるものである。日本は繰り返し和平を求める意向を示していた。これは、アメリカの歴史において、未曽有の残虐行為だった。アメリカ国民の良心を、永遠に責むものである」

**ルーズベルト暗殺事件**

1933年マイアミで煉瓦工の青年（無政府主義者ジュネーゼ・ザンガラ）の放った銃弾が当たっていたら、日米戦争は起こらなかった。もし、ルーズベルトが死んでいたとすれば、副大統領当選者のジョン・N・ガイスナーが第32代大統領として就任していた。

ガイスナーは、アメリカが海外の戦争に捲き込まれてはならない、という信念に凝り固まった中立主義者だった。ガイスナーが大統領になっていたら、日米戦争は起こらなかったはずである。

**【鼎談 第1章】誰が戦争を仕掛けたか**

**オレンジプラン**（対日占領をいつ頃から考えていたか）

第一次大戦と第二次大戦の間（1920年代～1930年代）に立案された、大日本帝国との予想される戦争へ対処するためのアメリカ海軍の戦争計画。日露戦争の時に、日本の勝利に脅威を感じて、セオドア・ルーズベルト政権が立案を指示した。

**早く戦争を始めたかったルーズベルト**

アメリカ海軍艦隊司令長官兼太平洋艦隊司令長官のリチャードソン海軍大将は、1940年（日本との戦争など利益がないから）日本と戦争すべきでない、オレンジプランは廃止すべきだと主張したら、F・ルーズベルトは直ちに彼を解任（少将に降格）、F・ルーズベルトは早く日本と戦争を始めたかった証拠。

**ヤルタの密約**

1945年2月のヤルタにおける米（ルーズベルト）・英（チャーチル）・ソ（スターリン）の

連合国首脳会談で合意された協定。　国際連合の設立とドイツの戦後処理、ソ連の対日参戦に合意。

ブッシュJr.が現役大統領の2005年にラトビアの首都リガでの演説でヤルタ協定を批判。ヤルタ体制は間違っていた。全体主義をやっつけて自由をもたらすためにナチズムは潰した。なのに何故東ヨーロッパまで解放しなかったのだ。（なんでソ連が仲間だったのか、ソ連を大きくしたのはアメリカの間違いだったのではないか）

**ルーズベルトは狂気の男**

フーバーとマッカーサーは1946年5月に3日間にわたり断続的に会っており、この時「この戦争は誰がやったんだ」「あの狂気の男（ルーズベルト）だ」と、意見が一致している。

**共産主義とナチズムを戦わせる**

フーバーはドイツとソ連という全体主義国家同士を戦わせておけばいい、と主張する

ソ連とナチスドイツを戦わせたらいいという意見は少数ではない、ウェデマイヤー米陸軍大将も同じ意見。

イギリスの伝統的な外交政策は、ヨーロッパ大陸を単一の勢力が制圧しないように

大陸の中を戦わせバランスを保たせる、というもの。　ナチズムは本来共産主義と戦うことが使命。しかし、チャーチルは伝統的な外交政策を否定し、逸脱してしまった。スターリンに味方してヒトラーを潰そうといた。

ナチスドイツのポーランドに対する要求（もともとドイツ人の住んでいた土地）に、

イギリスが突っぱねるよう後押したため、ドイツはソ連と不可侵条約を結び（ポーラン

ドの分割を密約）、ドイツがポーランドに侵攻することに。

**モンロー主義の勧め**

モンロー主義とは「孤立主義」ではなく、「地域覇権主義」。セオドア・ルーズベルトは、日本に対しモンロー主義を勧めている。

満州を日本の勢力圏と認める代わりに、他のところ（南北アメリカはアメリカの勢力圏）には手を出すな。

**親共産主義の米政権**

日本が降伏後の中国国内での国共内戦で、蒋介石への支援を行わずに共産党との妥協

　を求める中立外交を進める。（容共政策）

ソ連が誕生してからのアメリカの歴代大統領4人と国務長官5人はソ連を承認しなかったが、ルーズベルトになった途端に**ソ連を承認**してしまう（冷戦の原因）。

アメリカは大戦の最中に、ソ連に膨大な兵器（航空機、戦車、装甲車、トラック、ジープ、銃砲や弾薬）を供給している。

**【鼎談 第2章】過ったアメリカの政策**（フーバーの指摘する19のポイント）

【第一の誤り】

1933年の国際経済会議の失敗･･･フーバーが企画し、ルーズベルトになって延期。

（金本位制の導入にひびを入れた）

【第二の誤り】

ソ連の承認（前出、親共産主義の米政権　後段）

【第三の誤り】

ミュンヘン融和\*の成功と失敗･･･ヒトラーとスターリンが戦って潰し合うのは

不可避だったのに、潰し合いを止めることに努力した。

＊チェコスロバキアのズデーテン地方の割譲を要求するナチスドイツに対し、

1938年9月英仏伊独各首脳がミュンヘンで会談、ドイツの要求を受け入れた。

【第四の誤り】

英仏の「ポーランドとルーマニア」への独立保証（前出、共産主義とナチズムを戦わせる　後段）

【第五の誤り】

アメリカの宣戦布告なき戦争･･･1940年冬にドイツと日本に対して事実上の戦争\*を仕掛けた。これは数週間前の大統領選の公約に全面的に違反するもの。

＊1940年の通商条約破棄、1941年7月日本の在米資産の全面凍結、石油と屑鉄の禁輸、など日本に対して全面的な経済制裁を行った。

【第六の誤り】

警戒心を持った忍耐政策を取らなかったこと･･･宣戦布告なき戦争などせず、国際法の範囲内でイギリスに経済援助して、その資金でイギリスが武器等を買うようにすべきだった。

【第七の誤り】

ソ連共産主義を助けたこと･･･ヒトラーがロシアを1941年に攻撃したときに、共

ロシアを支援して、非公然の同盟関係になったこと。

【第八の誤り】

1941年7月の日本への経済制裁･･･【第五の誤り】参照

【第九の誤り】

1941年9月近衛和平提案を拒絶･･･近衛が提案した条件は、満州の返還を除く全てのアメリカの目的を達成するものであった。満州の返還ですら、議論の余地を残していた。

【第十の誤り】

日本との3ヶ月の冷却期間を拒絶･･･昭和16年11月に、天皇陛下が3ヶ月のスタンドスティル、すなわち冷却期間をおこうとの提案を、ルーズベルトは拒否。

【第十一の誤り】

無条件降伏の要求･･･1943年1月のカサブランカにおいて、ルーズベルトは枢軸国の無条件降伏を要求。ドイツ・日本・イタリアとの戦争をながびかせることに。

【第十二の誤り】

1943年10月のバルト三国とポーランド東部のソ連への譲渡

【第十三の誤り】

1943年12月、七つの国家にソ連の傀儡政権の押し付けを認めてしまったこと

【第十四の誤り】

ヤルタの秘密協定･･･スターリンが12の国々の独立に干渉を加えることを追認した

だけでなく、数世代にわたって国際関係に危険をもたらすような多数の秘密協定締結

【第十五の誤り】

1945年5月～7月日本の和平提案を拒否･･･日本は白旗を掲げて和平を求めていたが、**トルーマン**はこれを拒否。日本との和平はただひとつの譲歩（天皇の地位の保全）で達成できた。米国側が最終的にこの提案を受け入れたのは、数十万人の命が犠牲になった後だった。

【第十六の誤り】

トルーマンのポツダムでの決断･･･ポツダムでの合意の全てが、スターリンに対し

降参したことを追認したり、拡大することであった。

【第十七の誤り】

原爆投下。日本は繰り返し和平を求めていた。非道徳的な残虐な行為。

【第十八の誤り】

毛沢東に中国を与えたこと･･･蒋介石が共産党と協力することにこだわって、中国

に関する裏切りの秘密協定がヤルタでできた。

【第十九の誤り】

戦後世界に共産主義の種を撒いてしまったこと

**【鼎談 第3章】戦争を引き起こした狂気**

共産主義と戦う自由主義者フーバー･･･自由人に対する巨大な、知的または道徳的な脅威

浸透する共産主義･･･共産党員の増大、政府機関等への共産主義者の浸透

アメリカの破壊を策謀するコミュニスト･･･共産主義者はアメリカを解体し、ソ連の目的に合う国にするための活動をやっている。

戦争を画策し利用する共産主義･･･本音はプロレタリア独裁

中国共産党の野心･･･1979年に鄧小平は国家を承認してもらう代わりに、台湾には手を付けないと内諾。しかし、ニクソン、キッシンジャー、カーターがそれを怠って禍根を残す。

戦後の混乱と共産主義の膨張･･･ソ連を友好国、同盟国扱い。蒋介石に内戦を止め、共産党と連立政権を作れと。

ルーズベルトという狂人の欲望･･･日本との戦争の全体（前提?）がルーズベルトという狂人の欲望＝日本との戦争の全体（前提?）が戦争に入りたいというの欲望、日本への金融制裁が日本を戦争に追い込んだ、との認識にマッカーサーも同意した。

第2次大戦はアメリカにとっても正義の戦争ではなかった！というのがフーバーの見方。

**ウェデマイヤー将軍の回想---**

『第二次大戦に勝者なし：ウェデマイヤー回想録』（妹尾作男訳。1967年読売新聞社刊、1997年講談社学術文庫）

[経歴]ウェデマイヤー将軍は1897年ネブラスカ州生まれ。父はドイツ系、母はアイルランド系。反ナチスであったが、ドイツには親近感を持つ。1919年ウェストポイント陸軍士官学校を卒業、1936年陸軍大学卒業、1936～38年ドイツ陸軍大学留学。帰国後、参謀本部勤務、マーシャル参謀総長の懐刀・側近として1943年10月まで務めた。

ウェデマイヤー将軍はＦ・ルーズベルト政権の対日・独戦争挑発政策には反対であったし、開戦後はルーズベルト＝チャーチルの戦争指導方針（特に無条件降伏要求）には強い忌避感を持っていた。

【回想録の注目点】

1. ルーズベルトは自らの公約に反し国民・議会の意志を無視して参戦の意志を持っていた。
2. 米英ともに、明確な戦争目的なしに、戦争を戦うという愚行を犯した。
3. イギリスに対して軍需物資の供与はしても、中立・不介入の立場を守るべきだった。
4. イギリスも伝統的な大陸不介入戦略を忘れ、過剰に介入するという愚を犯した。
5. 米英の指導者は、日独を敵視する余りソ連を同盟国として扱い、ソ連共産主義を強大に。

6）1943年に実施される予定のノルマンディー上陸作戦を、チャーチルは強硬に反対し、徒に戦争を長引かせてしまった。

1. 戦後もアメリカはアジアで大きな戦略上のミス。ソ連に満州の権益を与え南下を許す。蒋介石に毛沢東と連立政権をつくるよう圧力をかけ続けた。
2. イギリスがドイツに降伏したところで、アメリカには脅威にはならない。イギリスは狡猾な外交手腕でアメリカを利用し続けた。（アメリカを参戦に）

【パールハーバーの意味】

ウェデマイヤーは「日本の真珠湾攻撃は、アメリカによって計画的に挑発されたもの」

という事実を認めている。

【無条件降伏の愚：戦争目的を見失った米英】

無条件降伏とは戦争の勝利のみを自己目的化すること。戦争はより残酷になり、より

長期化することに。

【あるべきだったアメリカの大戦略】

ナチスドイツと共産主義ソ連の二つの全体主義国家のとみ共倒れを狙い、イギリスに対しては武器援助はしても、あくまでヨーロッパの大戦に介入すべきでなかった。

【チャーチルの愚かさと狡さ】

1）300年以上の伝統を持つ英国の外交ドクトリン「大陸内部には関与せず、大陸内部

の均衡を謀り、英国の安全と繁栄を保持する」を無視した。

2）イギリスを戦勝国に導くことには成功したが、その代償は大きい。帝国を失った。

3）ノルマンディー上陸作戦に執拗に反対し、大戦の勝利を丸1年以上遅延させた。

【共産主義を世界に広める為に戦わされたアメリカ】

ナチスよりも一段と敵意を燃やす脅威的な侵略国家が出現。かつての同盟国ソ連に

対するヨーロッパ防衛にためのパートナーとしてドイツを必要とすることに。

【バランス・オブ・パワーと価値観外交】

ナチズムはヨーロッパに限定された脅威であるのに対し、共産主義は世界的脅威。

ブッシュJrのラトビア演説（価値観外交）とキッシンジャーの思考法（共産国家の

道徳性に一顧だにしない）

【インドからシナへ】チャーチルの暗躍によるウェデマイヤーの左遷？

【シナ共産党の狡猾さ】

日本軍の攻撃によって国民政府軍撤退後の地域の占領

【満州をソ連に売ったヤルタ協定】（前述）

【シナの共産化を防げず】マーシャルは国民党と共産党の連立が可能と考え、ウェデマイヤーの考えと対立

**いま明らかになった大東亜戦争の真相**（『FREEDOM BETRAYED』の衝撃）

真珠湾攻撃の前に、米国は日本侵攻を企画していた／ 太平洋での日本の戦争は自衛の戦争だった etc.

**日米戦争は狂人の欲望から**

「戦争を放棄すれば平和になる」（日本国憲法第9条）･･･この戦争放棄の考え方が発表

された時に、アメリカの学者で「世界中の国が戦争放棄をすることによってこの考え方

は成り立つ」と主張した人がいた。

【関連本】

◎アメリカはいかにして日本を追い詰めたか: 「米国陸軍戦略研究所レポート」から

読み解く日米開戦　(著) Jeffrey Record、草思社

◎ルーズベルトの開戦責任: 大統領が最も恐れた男の証言(著) Hamilton Fish、草思社

◎ルーズベルトの責任 〔日米戦争はなぜ始まったか〕（上・下）　(著)チャールズ・A・

ビーアド、藤原書店